



Title	メーヌ・ド・ビランと習慣の問題（1）：習慣と能動性
Author(s)	三輪, 正
Citation	カルテシアーナ. 1989, 9, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66925">https://doi.org/10.18910/66925</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# マース・ド・ビランと習慣の問題(1)

## —習慣と能動性—

三 輪 正

### 第一章 メース・ド・ビランにとっての習慣の問題性

メース・ド・ビランが習慣の考察に着手した事情は、よく知られているように、彼にとってかなり外的偶然的である。「思考能力にたいする習慣の影響を決定せよ。言い換えれば同一操作の頻繁な反復が知性の諸能力のおののおのにもたらす結果を明らかにせよ」という題目の懸賞つきの問題を出したのはフランス学士院であり、ビランはただそれに答えようとしたのである。一七九九年のことだ。その年彼が応募した論文は高い評価を得たが、入賞するにはいたらなかつた。賞に値する論文が無かつたので学士院道徳政治学部門は一八〇一年四月六日同じ問題を再度懸賞問題として公布した。これにたいしビランは先の論文を書き直したいわゆる第二論文を提出し、この論文が一八〇二年七月六日賞を獲得するのである。かような事情は、習慣という問題はビランが自発的に選んだものではなく、単に外から課せられた問題であるかのように思わせる。果たして実際にそれは彼にとって外的な異質な問題だったのだろうか。

我々は先に、コンディヤックらにおいてこの問題が特に重視されていたことを見た。ビランもその『習慣論』の中で、

習慣の問題が「観念学の中に生理学を導入するための、或は、」の二つの学問を結合して一つにする諸々の糾を更に緊密に固めるための、最良の機会である (P. 196, cf. p. 11) 」と書いている。ある意味で習慣は当時流行の問題であった。ビランがこの文を書いたとき、観念学派の影響下にあつたことは、確かである。「観念学の中に生理学を導入する」とか「」の二つの学問を一つにする」というデステュット・ド・トラン的観念学的発想が、ビランの習慣分析に様々な波紋と難点を持ち込むことについては後にのべられよう。しかしこの文を別の観点から解釈する」ことも可能である。観念学と生理学とを結び付けるとは、やはりビランの言葉を引用すれば、「身体的なもの *le physique* と精神的なもの *le moral* との間にある密接な結合関係 (p. 195)」を説明しようとするのではないか。そして身体的なものと精神的なものとの関係を明らかにする」といふ、メース・ム・ビランにとって殆ど運命的な課題ではなかつたか。彼は書いていふ、「」の結合関係は……感覺される場合もあれば、觀察される場合もある。纖細な氣質や、生活機能の何らかの障害によって自分自身の内を絶えず振り返えらされている人々によって、それは感覺され……感覺的性質の諸状態を把握し比較し、身体の変化にともなう情動や観念の動きをたどつてきた哲学者によって明瞭に觀察、論証される (ibid.)」<sup>1</sup>。他ならぬビラン自身こそ、この関係の感覺のためにも觀察論証のためにも、最適の人であることは彼の日記が示すところである。たとえば一八一八年二月十八日に彼は書いている、「私ほど、精神の諸状態がその時々の身体の状態に左右されることをよく認識するよう生まれついているものは、恐らく他にないであろう。」<sup>2</sup> 身体の影響をうけて常に動搖している弱い心への嘆き、それはメース・ム・ビランの日記の主要なテーマの一つである。

彼は既に一七九四年に書いている、「どんなに努力しどんなに予め準備しても、私は自分を押さえて平靜を保つこと(3) ができる。私の脳の全繊維は余りにも動きやすく、対象の刺激に負けてしまい、私にはそれを抑えることができない

…」「私は一日と続けて同じ状態で居たことが全然ない。朝と夕方とでさえ違つてゐる。私の嗜好にも、計画する」と  
にも長続きするものは一つもない。私は何かを持続的に欲求したことがまつたくない」<sup>(4)</sup> 絶えず動搖する不安定な自己  
にたいするこの嘆きはビランの生涯を通して聞かれるものである。<sup>(5)</sup> 「私は私がそうありたくないものに殆ど常になつて  
おり、私がそうありたいと希望するものになつたためしは滅多にない」<sup>(6)</sup> とも書かれている。この弱さこそがビランに、  
身体の精神に対する影響の考察への目を開かせたものである。既に早く一七九三年の日記には次の様に書かれている、  
「精神的なものを獲得するためには身体的なものを通らなければならぬ」。精神と身体との関係の問題はメース・ド  
・ビランにとって、他のなにもまして、彼自身に關わる問題だったのである。ところで精神の不安定と動搖にたいす  
る嘆きは、裏返して言えば、その安定恒常にたいする希求である。そしてこの希求は習慣の問題と密接に関連する。習  
慣はすぐれてビラン的な問題だったのである。実際学士院の出題にはるか先立つて一七九三年ビランは次のような問題  
を自ら問うてゐる、「一連の活発な感覺が習慣となふと、それより弱い感覺に慣れ得ないはどうしてだらう。どうし  
てその時退屈 ennui へ陥ばれるあの在り難を difficulté d'exister を味わうのだろうか。それは生の原理がいつたん  
或る程度の興奮状態に慣れると、それ以下の程度では無感覺になるからではなかろうか」<sup>(7)</sup> 我々は同様の洞察に富んだ  
観察をビランの若い日の日記に少なからず見い出すのである。<sup>(8)</sup>

習慣の問題はビランにとって決して外的な問題ではなく、彼自身の問題でもあったのである。学士院の課題は彼が日々「感覺して」こと、即ち身体的なものと精神的なものとの関係を「観察論証する」ための最良の機会であった。  
それは又ビランにとって自己自身を追求する機会でもあった。この点こそ後に見るように、彼の『習慣論』の最も興味  
深い側面を示すものである。メース・ド・ビランのそれに先立つ習慣考察において、習慣は精神的道徳的観点からも

理論的観点からも考察された。しかしびランにおけるように自己自身のいわば実存に関わる問題として取り上げられることは殆どなかった。彼において習慣の問題は理論であるに先立つていわば「生きられて」いた。ジョルジュ・ルロアの次の言葉には極めて適切なものがある。「メース・ド・ビランと共に問題は一挙に新しい興味を帯びる。彼は習慣の問題に自身の立場から迫ろうとし、この問題を彼自らの個人的関心の全体に直接結びつけるものである。」<sup>(9)</sup>

事情が以上のごとくであれば、ビランの習慣論の明らかにしようとするものが単に理論的道徳的原理にとどまるものでなく、生の全体に関わるものであることは確かであろう。ビランが『習慣論』冒頭で引用しているミラボーの言葉のとおり「誰も反省しようとしない」習慣を反省し、「一方では人間のあらゆる進歩の普遍的原因であり、他方では人間の蒙昧化の普遍的原因である（p. 9）」この習慣というものを考察することによって、メース・ド・ビランは、習慣の根底にあって習慣を真に支えているもの、即ち、我々の内にある真に能動的なものの発見へ向かうのである。

## 第二章 習慣分析のための予備的諸概念

メース・ド・ビランは、思考能力にたいする習慣の影響という課題に取りかかるに先立つて、かなり長い序文を置いてその中で思考の能力そのものの検討を行っている。この検討は課題にとって必要であり、不可欠でもある。それはメース・ド・ビラン自身つぎのように説明していることである。「課題はその表現からみて、悟性の諸能力や働き方が既に知られているものとしている。実際は悟性の働きの繰り返しがその諸能力にどのように影響し、いかなる変化を与えるかを決定するためには、諸能力及びそれらの働き方の性質や数、それら相互間の依存関係や從属関係を正しく認識しなければならぬ（p. 10）。」ビランは続けて、これらの問題の回答の中に「課題への答えが含蓄されて入っている

(ibid.)」と書いている。この意味で序文は習慣論の展開にとって極めて重要なものを持つ。ビランは「この論文の全体が(序文の)分析の続き以上のものではないだらう」とさえ書いている。されば、序文の分析と本文のそれとの間には、仮設とその検証との間の関係に対応するものがある。習慣の影響の分析は、思考能力の分析に大きく依存するが、この思考能力の分析そのものもその正しさの検証を、習慣の影響の分析結果のうちに見いだすからである。(Cf. p. 43)このことは感覚という言葉の代わりに印象 *impression* という言葉を使い、また印象の中に感覚と知覚とを区別するに既に現われている。ビランの場合コンディヤックと違って印象の能力が生物における最初のそして最も一般的な能力とされる。(Cf. p. 12) かように感覚よりも印象をより一般的とすることは、感覚と知覚とのビランによる区別に由来する。コンディヤックの感覚概念は余りにも意味が広すぎてすべてを混同してしまうとビランは考える。(p. 16, note 1) 彼は感覚の語の代わりに印象の語を用い、印象のうちに能動的印象と受動的印象とを区別し、受動的印象を感覚の名で呼び、能動的印象をば知覚の名で呼ぶ。受動的印象とは「その中で感受的なものが勝つており、その感受的なものに運動が伴う」と殆どないといふの」印象であり、能動的印象即ち知覚とは「その中で運動が優位をしめ、いわば主導権を握っている」印象である。(ibid.) ただし現実の具体的な印象はこの两者からなる混合的な性質のものだが、ビランは極めて巧みな仕方で視覚、聴覚、触覚等の五感の各々の中にこの両者の存在を指摘し、それによつて二つの印象の区別を立証するのである。

感覚と知覚とのこの区別はビランの以後の分析の出発点そのものである。この二つの能力を認識との関係においてみてみよう。受動的印象のみでは「自己」と諸印象とが区別されず諸印象相互間の区別もされない」とビランは言ふ。(p. 17) このことはビランにとって、受動的印象即ち感覚だけでは何物も判明に認識され得ない」とを意味する。感覚は

「絶えずかなり混雜しており」不安定であつて、それだけでは明確な認識は到底あり得ないのである。能動的印象即ち知覚をもつて初めて初めて外界の事物の認識が可能になる。外界の認識は意志的に運動する我と、それに対抗する障害物との間の関係を前提とするが、この関係を与えるのは運動的能動的印象であるからだとビランは考へるのである。彼は運動ないし行動が認識において果たす役割を極めて高く評価するのである。「ひとは自ら動き始める限りにおいて何かが存在する」という最初の報告（関係）*le premier rapport d'existence* を知覚する、運動を続けようと意志する限りにおいて最初の報告に続く他の報告（関係）を知覚する」と彼は書いている。（p. 18）運動あるいは行動が認識において果たす役割は大きいのである。實際もろもろの動物の能力はその感覚能力よりもむしろその運動能力に比例するものであり（p. 12），活発な運動器官としての手は「分析の道具の第一のもの」である（p. 20）などビランは指摘するのである。したして運動的かつ能動的印象としての知覚が『知慣論』のマース・ム・ビランにおいて、認識の出発点を形成するにいたる。

印象の受容が後に残す何らかの変化を限定 *détermination* ル・ビランは呼んでいる。<sup>(2)</sup> この限定にも能動的なそれと受動的なそれが区別される。（Cf. pp. 31-3）ただし能動的な限定は運動的限定と呼び、受動的な限定は感覚的限定と呼んでいる。（ビランの「う限定は、たゞ一回の印象であれその後に残る影響であり、一種の習慣であつて、限定の概念には習慣のそれを先取りやるものがある。」）ビランはまた記憶の働きにも能動的なものと受動的なものとを区別し、意志の介入しない受動的な過去の再現を想像 *imagination* の名で呼び、意志的運動と共に行われる過去の再現を想起 *rappel* または記憶 *mémoire* と呼んでいる。（pp. 36-7）この概念規定において能動、すなわち知覚、運動的限定、及び想起は、意志的運動との密接な関係によって特長づけられ、他方受動、すなわち感覚、感覚的限定ならびに想起

像は、運動性意志性の欠如によつて特長づけられる。そしてビランの場合外界の認識を可能にするものは常に前者の諸能力であつて、後者の諸能力は、何かがあるとか自己はどうあるかについて、いかなる認識も与え得ないのである。

認識能力に関する上に挙げた区別は、以下でみられるように、メース・ド・ビランの習慣分析に大きな役割を演ずるものである。ところでビランの言ふところによれば彼は習慣の分析そのものを通して上の区別に導かれたといふ。ビランは始めの『習慣論』の序文の下書きの中で次のように書いてゐる。「習慣という主題から生まれると思われる諸々の矛盾と習慣が我々の印象に及ぼす影響の多様さとについて長い間考察することによつて……、この主題そのものが、諸印象を分類して……観念学者たちが感覚という名のものと混同している諸印象を区別する新しい方法を提供してくれるであろうと、私は考えた」<sup>(1)</sup>と。序文の分析と本論の展開との間に相関的な関係があることについては前に言つた。上のべた区別は習慣を分析する為の道具であり、同時に習慣の分析の結果でもある。これらの区別がビランの習慣分析におおきく寄与したことは確かである。二種の能力にたいして習慣は相反する仕方でその影響をおよぼすことは後に見るとおりである。ところで予め次のことが注意されねばならない。

それは『習慣論』の序文においては能動性 *activité* という語が、意志よりも運動により多く関係づけられているということである。おきに見たように、能動的な諸能力は特に運動との関係において特長づけられた。ビランははつきりと「能動性は……動く（動かす）」という能力に直接結びついている（p. 15）<sup>(2)</sup>と書いてゐる。能動的諸能力の定義において意志にも言及されていたことは上にも見たとおりである。しかし、『習慣論』を書いた時のビランにとって、能動とは何よりも先ず運動であった。あるいは寧ろ、能動性と運動との間に区別をする必要を感じていなかつたように思われる。努力の印象 *impression d'effort* をぬぐる困難も、そこから由来するようである。この印象はビランにとって

能動性そのものであった。ところでの印象つまり努力感は、習慣によって印象にともなう運動が容易かつ迅速になると反比例して減退し遂には消滅する。このことは、能動的なもの即ち運動的なものは習慣によってすべて昂揚するという習慣の一般原則に背馳するものであった。この事実はビランにとって意外であったようで、彼は努力感のこの減退を「奇妙な *singulier*」こととしているほどである。(p. 35) この困難は、努力の印象をばその能動性のゆえに全く運動的だとみなしたことに由来するようと思われる。能動性を運動と同一視することは、感覚と知覚との差異を無視することにも匹敵する混同ではないか。予め言っておけば能動的習慣と受動的習慣との区別にみられる曖昧さもその起源を、能動と運動との混同のうちに持っていると言つてよいのである。

これらの語の用法においてビランがデステュット・ド・トランから大きく影響を受けていることはビラン自身のある注からも明らかである。(p.15, note 1) 動覚 *motilité* に関するトランの理論がビランの習慣分析に大きく寄与したことは確かである。他方でこの理論だけではビランがその分析において多くの困難に縛着せざるを得なかつたこともまた確かである。しかしこれらの困難こそビランをしてトランを批判し乗り越えさせるに至つたものである。懸賞論文出題者の意図は、既に決定づみの諸能力にたいする習慣の影響を決定するということに恐らくあつて、諸能力そのものの再検討ではなかつたであろう。しかし習慣の分析は思考の諸能力の再検討へ必然的に導いて行つた。この点こそビランの『習慣論』の最も興味深い側面であつて、この故にこそ、習慣分析の成功よりも失敗ないし困難のほうが我々にとってより興味深いものを持つのである。

## 第三章 受動的習慣

## 一、感覚の習慣

各々の思考能力にたいする習慣の影響の考察においてピランは先ず感覚への影響からはじめた。感覚の習慣については日常的にもよく知られている。感覚器官が対象の刺激によって損傷や破壊をうけるのではなく、あらゆる受動的感覚はある程度継続するか又は頻繁に繰り返されると、徐々に弱化しついには消滅するものである。これに反して知覚は繰り返されるにつけより一層判明なものになってゆく。感覚することが少なければ少ないとそれだけより良く知覚すると言ふべきである。(p. 49-50) 知覚については後に論ずるとして、しばらくピランの筆にそつて感覚の減退の理由について考察しよう。

ところで感覚のこの減退に関するピランの仮説のうちで我々は、チスランの語を借りれば、「一種の生命的力動論 dynamisme vital (p. XLI)」を覗いだす。感覚がいかに減退するかを知るには予め感覚がいかに始まるかを知らねばならない (p. 50) として、感覚がいかに始まるかを知るためにピランは生命体そのものの原理の検討から始めるのである。各々の生命体には、外界や内部からの刺激にたいして自己の平衡を保つための生命原理が備わっている、とピランは述べる。(p. 51) 生命体が平衡状態にある時、それぞれの感覚器官はその器官の「自然調 ton naturel」にある。すなわち生命体あるいは他の感覚器官にたいしてその感覚器官としての自然な規則的な関係においてある。その場合その生命体にあるのはただ「一様な存在感 sentiment uniforme de l'existence」であるとピランは述べる。ところで、いかの感覚器官がなんらかのかなり強い刺激をうけるとその器官の調子が変化し、その結果としてそれまでの一様な状

態からその器官がいわば「浮かんで ressortir」くる。そこに感覚が生じる、というのである。感覚は生命体におけるなんらかの攪乱の結果だというのであり、したがつて感覚の大きさは攪乱の大きさに比例し、平衡が回復されるまで感覚が存続するということになる。ビランはベルクソン的に、生命体になんらかの危険を知らせ、それに準備させることが感覚の役割であると言つてもよかつたであろう。

習慣による感覚減退の理由も、感覚の上のよきな性質から出発して説明される。生命体の平衡が攪乱されると「感覚原理 principle sensitif<sup>(13)</sup>」は、あるいは刺激を受けた時の感覚器官の調子を低める」とにより、あるいは生命体全体の調子を徐々に高める」とによつて、平衡を回復しよへん、「はじめの状態に戻らうとする」とビランは書いている。(p. 52) 習慣による感覚の弱化はかようにして生じる。つまり習慣は個々の感覚器官の調子を生命体全体の調子にまで引き下げるか、あるいは全体の調子を当の感覚器官の調子にまで高めることをとおして攪乱をおさえ、感覚を消滅させるのである。これが生命体にとって有益なことは容易に理解される。生命体の活動における混乱がそれによつて收拾され、それをとおして生命体は環境の変化に順応することができるのであり、かようにして苦痛も耐えられうるものとなつてくるのである。

感覚習慣のこの説明は、それをトランシやビンヤの説明と対比するときその巧妙さがわかるであろう。これらビランの先行者たちは、この点に比較作用をもちだし、一種の主知主義におちいるほかなかつたのである。感覚の習慣を感覚そのものの原理から説明したのはビランの功績である。ところでビランの上のよきな説明からすると、感覚もその習慣もいざれも全面的に受動的ではなく、なんらか生命的能動的なものをあらわすことになる。このことは、感覚とその習慣を受動的としたビラン自身がみとめていることである。彼は明白に「感覚の減退は……感覚を生みだした原理そのも

のの働きの結果である (p. 54)」といふ。また「この漸次の減退の効果や状況は、器官的感覚的身体に内在する」の原理の実在と具体的な活動とを証明するものである (ibid.) と書いている。その原理とは生の原理 *principe vital* (いわゆる語がピランの日記にあることは先に見た) あるいは生命原理 *principe de vie* (p. 51) であり、この原理によって感覚もあれば感覚の習慣もあるのである。しかしそれを認めぬいふは感覚=運動というはじめの立場をみずから否定するといふのである。ピランは、現象がわれわれにそれを認めるいふを強制する (p. 54, note) と言いつつ、ほとんど嫌々ながらのようだ、いわゆる原理の働きを「感覚的能動性 *activité sensitive*」いう形容矛盾的表現で特長づけるのである。(Cf. p. 14) この能動性の承認はピランの理論の発展にとって重要なである。しかし『習慣論』の時点ではピランはこの能動性の持つ意味を追求しようとはせず、感覚的能動性は意識ないし意志を欠く点で運動的能動性と異なると言いつつ、いわゆる能動性の違いを指摘するにとどめている。感覚的能動性の存在はピランにとって煩わしいものであつただろう。能動性=運動性という立場では、感覚が能動性を含むことは理論を脅かすものだつたからである。後にラヴェッソンがあらためてこの点を論じ、より整合的な解釈をあたえようとするであろう。

感覚の習慣にはさうに別の積極的契機があくまれる。それは感覚の減退が知覚の明確化の第一要件だということである。(Cf. p. 65) 感覚の習慣の、認識にとって最も好都合な側面がここにある。習慣は感覚の消去を介して判明な知覚を準備するのである。受動的な感覚だけであれば人間になんの発展もない。ピランは書いている。「人間の全能力が感覚とその様々な現れとに限られる」とすると、……習慣はその能力にたいして最もいまわしい影響を及ぼすことである。自然的欲望が発現する時はべつとしてそれ以外の時は感覚作用がなじみの印象をもはやうけいれることがないため、生命の刺激的な諸活動は昏睡ないし麻痺状態になつて沈滞する。あらゆる行動はかような存在にとって異変の始まりであ

り、『わが死の始まりである (p. 64)』。それは「習慣の帝国 l'empire de l'habitude (p. 61)」であり、やがてが習慣に支配されるときである。やがて安全はありえても進歩はない。人間にとくになによりも重要なものは意志的運動的能動性であり、この能動性といふに「向上的な進歩が始まるのであり、そして習慣はこの進歩の推進役となつてゐる (p. 66)」。ルラランは書いてゐる。

未完

注

(1) 『習慣論』と略称した書の正式な名称は『思考能力にたいする習慣の影響 Influence de l'habitude sur la faculté de penser』である。この書名は学士院の課題にほぼ対応している。初版は受賞の数か月後に Hendrichs から出版された。

この書には現在つぎの三種の版が流布している。

[—] *Influence de l'habitude sur la faculté de penser*; tome II de l'édition des Oeuvres de Maine de Biran publiées par P. Tisserand, Paris, Alcan, 1922. Réédition en photocopie par Librairie Slatkine, 1982.  
[—] *Influence de l'habitude sur la faculté de penser*; réédition de celle de P. Tisserand avec pagination différente, Paris, P. U. F., 1954.

concours du C. N. R. S., édité par G. Romeyer-Dherbey, Paris, Vrin, 1987.

Vrin 版は『習慣論』の第一論文、その草稿などを収録しており、今後の研究はこの版に依拠すべきであろうが、本論文では〔2〕の P. U. F. 版に依拠した。その理由については「デステュット・ド・トラシとビシャとにおける習慣の問題」の第一章の注<sup>1</sup>を参照されたい。本文内の注のページ数はこの版のそれを示す。

- (3) Id. T. I, p. 34.
- (4) Id. T. I, p. 48.
- (5) Cf. le journal du 1<sup>er</sup> au 8 mai 1818. Id. T. II, p. 95.
- (6) Id. T. II, p. 40.
- (7) Id. T. I, p. 19.
- (8) Cf. Id. p. 29 et p. 47.
- (9) G. Le Roy, *L'expérience de l'effort et de la grâce chez Maine de Biran*, Paris, Boivin, p. 65.
- (10) ルネサンスの思想の歴史の記述の書籍の著者である。著者は明確に規定してあるが、論述は複数である。
- (11) V. Delbos, *Maine de Biran et son œuvre philosophique*, Paris, Vrin, 1931, p. 310 note 6. 但し、ルネサンスの思想の歴史の書籍の著者である。著者は明確に規定してあるが、論述は複数である。
- (12) ルネサンスの思想の歴史の書籍の著者である。Cf. Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, p. 395.
- (13) ルネサンスの思想の歴史の書籍の著者である。著者は明確に規定してあるが、論述は複数である。